

「俳句同好会 会員 自慢の十首発表」

シルバー俳句同好会では毎月一回作句発表会を催しています。お題は毎週木曜日TBSテレビで放映される「プレバト俳句」で取り上げられるお題をそのまま頂いています。放映済み四週分についてメンバーそれぞれが自慢作をもち寄り、それを皆んなでわいわいガヤガヤ丁々発止で一句一句を勝手に選評しながら研鑽を重ねています。

俳句は情景や想い出に心を開き、歴史や文学を手繰り寄せる言葉さがしの小さな旅なのです。

私たちと一緒にシルバー俳句会を楽しみませんか。是非一度、句会を覗きにお越し下さい

矢野 善之

句会 開催予定

毎月第四金曜日 午前十時から正午まで

会場 センター会議室

詳しくはセンター事務局へお尋ねください

矢野善之

靴はねる地は散る桜花の新入学

「やっとわが子も新入学まで無事育ったのね」お母さんの気持ちも鮮度よし。

春爛漫翠翁潜むか故城の影

すいおう

えい

「荒城の月」土井晚翠

蝉の難猛暑に追われ鳴きの息む

せみ

なん

や

昨夏は猛暑日照りつづぎでした。

ふる里は人間うれし処暑の風

じんかん

しょしょ

久しぶりの古里はやはり人も風も気持ちいいなあ。

蟋蟀の寒露の立ちて地に沈む

こおろぎ

秋の夜長を盛んにした蒸したちは、いったい何処へ行ってしまったのだろう

雄鳥に向き合うバツタの風寒し

おんどり

十九年二月二七日米朝トップ会谈不調（ハノイ）

憲法の解釈栄えて国滅ぶ

大阪弁護士会会長小寺一矢（引用発句）国は憲法守れりも憲法国を護れしか。

十六夜の臥所に翳る君惜む

いぎよい

ふしど

かげ

今となつてはただただ惜しまれる、若き過ぎし日が。

氷搔く商店の女房の玉の汗

こおりか

でこや

によぼう

カンタン服の胸元に大粒の汗を浮かべながら、生業のため一杯十円のかき氷を無心に掻いている女主人。

逢瀬しに湯宿に籠る時雨かな

おおせ

こも

物見遊山を望んできている訳ではない。折り良いしぐれ！

鈴木康良

早朝の紫雲英げんげ咲くなか犬散歩

食べ尽す房総の海春旅行

強したたかな自動ドア上燕つばめの巣

ベゴニアの紅色べにいろに日々魅せられる

梅雨のダム水を湛たたえて憂うれいなく

紫陽花しんかの真花見過がくごし罅がくに酔よう

夏風邪や十日耐えても平癒へいゆせず

水無月や散歩で気付く花暦はなごよみ

夕暮れに影絵が冴さえる冬の色

冬立つや湯殿こもに隠る演歌かな

伴 隆夫

老いすぎて豆を撒かずに頬張りぬ

冬寒や季違えけり花一輪

独り身に衣更え告げる老店主

満艦飾部屋干し産着梅雨の朝

仄かほる亡母の忌明けの衣更え

綱引きの友のせなかのあたたかさ

秋深し三杯目の珈琲君を待つ

妹嫁してミカンの山は減らざりき

風止まずザウルス橋の夕日かな

冬枯れや渡り鳥追う老いカラス

植田キクイ

ひし餅が好きたふ姫の破顔かな

滝桜姫は白き軍手して

赴任地へパスポートの桜携へて

年忌終へし族うからの墓や桜蕊しづ

菖蒲湯を泳ぐブリキの赤い魚とと

人類ひとあ生れし太古の海や夏たぎる

霊まつる実家いえ目指しゆく分岐点

姫の背にシャッター街の夕暮るる

吹雪く道を帰る人待つ灯と犬と

雪見風呂猿はいづくの山に居む

伊東 威郎

春近しペチュニア垂れて妻笑う

富士雪解駿河の恵み育ちおり

自動ドア猫迎え入れ春風も

急かされて孫とつり上ぐ井戸西瓜

へぎそばと越後酒で待つ大花火

自在鉤笑顔並びて里の秋

天高く孫を誉めあうテント席

錦秋や異邦語満つる貴船谷

冬日和むかしばなしでバスを待つ

町興しペットボトルの冬ホタル

「短歌五首」

才本節子

吾の手にへビの卵と言いながら

ピン球乗せるサークル仲間

老いたなと感^でじる^くことに出交わすが

ピンポン玉を全力で追う

桜ばな散りたるあとに梨のはな

白井のなしの美味なることよ

講師よりなしの品種に祇園ありと

千葉の白井でふるさとおもう

梨栽培摘果作業は美人なる

実を残しつつあとは摘みゆく